

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：33906

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00559

研究課題名（和文）『色葉字類抄』を中心とする字類抄系諸本の見出しと注文についての研究

研究課題名（英文）Research on headings and annotations of various edition in the Jiruisho series, with a focus on Irohajiruisho

研究代表者

村井 宏栄 (MURAI, Hiroe)

椋山女学園大学・国際コミュニケーション学部・准教授

研究者番号：40610770

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 800,000円

研究成果の概要（和文）：中世イロハ引き日本語辞書においては、多く見出し項目と注文内の情報の出入り現象が見られる。本研究課題においては、この両者を分析した結果、次の結論を得た。すなわち、二巻本『色葉字類抄』と三巻本『色葉字類抄』を比較すると、三巻本で注記格納されているものが圧倒的に多く、三巻本は字種や構成要素に共通性を持つものを中心に注記格納していること、注記格納されることで情報内容が相違しうるものが生じていること、さらに二巻本では前接見出しの一部に対する情報であっても見出し化される場合があることを指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代の国語辞典とは異なり、多くの中世イロハ引き日本語辞書においては、見出したる漢字表記と、その直下に割り注形式で多く語形を示す片仮名注記（いわゆる和訓）及びその他の注文の合計によって構成される。当該辞書群は、項目の連続によって構成される。諸本生成の過程において、ある本で見出しであった情報が別本では注記内に格納される現象は広く見られるが、この現象に着目した研究は多くはなかった。本研究ではこの注記格納現象に注目することにより、各異本間の見出し生成のシステムや成立の前後関係の推定、また、そもそもの見出し掲出システムが未解明である点も浮かび上がった。

研究成果の概要（英文）：In the medieval Japanese dictionary, there are many cases where the information in the heading and order is confused. In this research project, I analyzed this case and came to the following conclusions. First of all, in other words, between the two-volume edition of the "Irohaji Ruisho" and the three-volume edition of the "Irohaji Ruisho", an overwhelming majority of the notes are stored in the three-volume edition. And next, the three-volume edition stores notes mainly for items that have common character types and constituent elements, and there are cases where the information content may differ due to the storage of notes. Lastly, I pointed out that in a two-volume edition, even information about part of the preceding heading may be turned into a heading.

研究分野：日本語学

キーワード：『色葉字類抄』 日本語辞書史 二巻本 三巻本 注記 見出し

1. 研究開始当初の背景

現代の国語辞典・漢和辞典類とは異なり、古代の日本語辞書の多くにおいては、詳細な凡例は示されていない。『類聚名義抄』においては「凡此書者、為愚癡者任意抄也...」(観智院本篇目帖、読点類稿者、以下同じ)とされ、『色葉字類抄』においても「叙曰、漢家以音悟義、本朝就訓詳言...」(三巻本 前田本 序文)とあることから、凡例や序文自体は存するものの、当該辞書の立項や注記などの編纂方針が具に明示されるわけではない。したがって、その方針については知るためには、当該辞書の内部から構造を探るといった手段が考えられる。

しかしながら、辞書は多く、伝写においてその内容を変えていく。ストーリー性のある物語や説話とは異なり、辞書は文脈を持っていない。辞書の多くは、見出しと注文をその構成単位としており、項目の増補や節略、注記の加除は比較的自由に行うことができる。したがって、言わば写すたびに別の辞書が誕生していく。異本発生の過程において、当該辞書が他本とどのように異なるのかという問題は、その辞書がいかなる構造を指向していったのかという、諸本展開における方向性の解明につながる。本研究課題は上記の問題意識を有し、中世イロハ引き日本語辞書の見出しと注文の関係という視点から研究を行った。

現代の国語辞典とは異なり、中世イロハ引き日本語辞書の多くにおいては、見出し項目に漢字表記を、注文内に片仮名注記(いわゆる「和訓」)を記し、両者の合計によって辞書項目が構成される。同一片仮名注記に統括される別漢字表記は、注文内に表示されるか、別見出しとして代表見出しに追従するという二方法が看取される。諸本展開において異本間を比較するに、ある諸本において注文内に位置する漢字表記が、別諸本においては別見出しとして独立する現象はまま見られる。本研究は、従来の辞書史研究で等閑に付されてきた、見出し項目の統合/独立化現象を全数的に調査し、辞書史における諸本生成の原理を解明することを目的とし、辞書構造のあり方や、辞書記述の情報について、『和名類聚抄』等他辞書における記載のあり方からも検討を行った。

2. 研究の目的

(1)上記の視点から、本研究は中世という日本語書記法の多様性が最も拡大化した時期において編纂された日本初のイロハ引き辞書である『色葉字類抄』を取り上げ、最も組織の整備が進んだ三巻本と、その前身と評価されてきた二巻本について相互の見出し字注文内格納現象を比較することで、まずそれぞれの見出し立項の実態を考察する。従前の研究において、二巻本『色葉字類抄』と三巻本『色葉字類抄』の近似性は多く指摘されているところであり、「多少の相違はあるが、豊字部音読語を除いては、『三巻本色葉字類抄』のそれとよく一致し、分類項目・所収語彙・配列順序など、ほぼ全同と言ってよい」(峰岸明 2000)などとされてきた。しかしながら、二巻本・三巻本間では同じ掲出グループ内において見出し 注記が顛倒する例は多く見出され、「ほぼ全同」とは言えない。このような関係がなぜ生じているのか、検討を行う必要がある。さらに字類抄諸本に考察対象を拡げ、二巻本『世俗字類抄』天理本・東大本の比較、さらに二巻本『世俗字類抄』と二巻本『色葉字類抄』の比較検討を行う。

(2)同時に、当時の書記実態として漢字片仮名交じり文の実態も研究を継続する。

3. 研究の方法

研究遂行のため、令和3～令和5年度にかけて、次の作業を行った。

- (1)古辞書全般にわたっての、見出しと注文についての先行研究の網羅的調査
- (2)特に本研究課題が研究対象として挙げる字類抄諸本の構造についての先行研究の調査
- (3)三巻本『色葉字類抄』・二巻本『色葉字類抄』の見出し字注文内格納現象のデータ収集
- (4)他の字類抄諸本間の見出し字注文内格納現象のデータ収集
- (5)(3)・(4)について、字類抄諸本の典拠として指摘がなされている『和名類聚抄』における調査
- (6)当時の漢字片仮名交じり文献における書記方法の調査(観智院本『三宝絵詞』他)
- (7)(3)～(5)に基づく結果の解析と、論旨の改善、追加の調査

4. 研究成果

(1)字類抄諸本における見出し字注文内格納現象の把握と検討
二巻本及び三巻本『色葉字類抄』における見出し字注文内格納現象の全用例を採取し、検討を行った(「二巻本及び三巻本『色葉字類抄』における注記格納」、『名古屋大学国語国文学』第116

号所収)。結論として、以下3点を得た。

字類抄諸本間において、見出し注記は可変的であり、編纂意図によって注文内に格納されるものもあれば、見出しとなる場合もある。

二巻本及び三巻本『色葉字類抄』間の注記格納は、多くが二巻本における見出しを三巻本において注記化することで成り立っており、三巻本は字種や構成要素などの共通性により、別見出しの注文内に統合して収めている。

注記格納される場合には注記内容が見出しのどこにかかるとかという解釈のずれが生じることがあり、当該辞書の見出し注記の掲出システムもふまえて理解しなくてはならない。

さらに、当該論文で得られた示唆と今後の課題は以下2点である。

見出し注文の関係から比較するに、二巻本から三巻本の形態への移行はあり得ても、その逆は不可である。

二巻本の見出しは、時に前接する漢字見出し語の内の一文字に対する情報であって、仮名注記に対する見出し群が対等に配列されていない場合がある。

上記の内、特に注目すべきはである。たとえば次の「チカラカハ」の例では、二巻本では見出しとして「逆斬・靱」を掲出しており(a.)、対して三巻本では見出し「逆斬」の中の「作」注記として「靱」が格納されている(b.)。『和名類聚抄』の用例(c.)からわかるように、これは「逆斬」・「逆靱」を標示する意図を持っていると判断できるが、二巻本・三巻本ともに「靱」しか示さず、熟語表記「逆靱」の後部構成要素1字しか示していないことになる。注記格納がなされている三巻本は「靱」が「斬」に対する字体注記である(即ち「チカラカハ」=「逆斬」・「逆靱」)と伝えやすいが、二巻本のような表示方法は、「靱」がすなわち「チカラカハ」だと誤認される可能性があるろう。

a. 二巻本：逆斬(チカラカハ) 靱[同](チ雑物・上上 38 才 8)

b. 三巻本：逆斬(ケキソ)[チカラカハ/又作靱](チ雑物・上 67 ウ 4)

c. 逆靱 楊氏漢語抄云逆靱[知賀良加波]一云逆斬(元和古活字本『和名類聚抄』巻 15 調度部鞍馬具)

つまり二巻本の見出し字掲出方法は、仮名注記(たとえば上記の「チカラカハ」)が掲出グループ内に見出し字に等価にかかっているものではなく、ある見出しが前接見出しと対等の関係ではなく前節見出し熟語のうちの一文字に対する情報に過ぎない場合があるというものである。この点は従前の研究で詳細に検討されていない。

現在、研究代表者は字類抄諸本間の用例補充調査を継続している。なお、この2点は、発展的課題として科研費課題「中世イロハ引き日本語辞書における見出し掲出システムについての研究」(令和6~8年度予定)にて研究を継続していく。

(2) 『日本国語大辞典』(第2版)表記欄における『色葉字類抄』の表記について

現在、日本語史研究において最も用いられていると思われる『日本国語大辞典』第2版(小学館)は、その表記欄において三巻本『色葉字類抄』が示されている。ただし、注記レベルのもの多くは登載されない。『日本国語大辞典』表記欄では『色葉字類抄』は「かわのかみ」に対して「河伯」「河伯神」の表記を有することになっているが、二巻本や『和名類聚抄』の例を参照することによって、「河伯神」ではなく、「河神」を指示している可能性が認められる。すなわち、イロハ引き辞書の構造を再検討することにより、辞書情報の読み取りを修正できる可能性があり、このことは他分野にも影響が小さくない。

a. 二巻本：河伯(カハク)[カハノカミ] 水伯 河神[已上同](カ人倫・上下 7 ウ 1)

b. 三巻本：河伯(カハク)[カハノカミ/或加神字] 水伯[同](カ人倫・上 95 ウ 6)

c. 河伯 兼名苑云河伯一云水伯河之神也[和名加波乃加美](元和古活字本『和名類聚抄』巻 2 鬼神部神霊類)

本研究課題の遂行によってこのような例が多数見出され、辞書資料の構造を検討することによって辞書情報を正しく理解することの有用性が再評価されうと思われる。

(3) 中世漢字片仮名交じり文献の書記実態について

イロハ引き辞書が編纂・利用された時期の書記実態解明という目的のため、重点(例「コ、ロ」における「、」)と文章表記における漢字文節 仮名文節の比率の問題に注目し、漢字片仮名交じり文で記された観智院本『三宝絵詞』の重点用法についてそれらの概要を示した(『観智院本『三宝絵詞』における重点(、)』『言語と表現 - 研究論集 - 』19)。

さらに、中近世の語彙の反映という意味で本研究の知見を反映したかたちで『源平盛衰記』の注釈活動を継続して行った(『源平盛衰記』全釈(一七 巻六 1)、『名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇』58-2・『源平盛衰記』全釈(十八 巻六 2)、『名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇』59-2・『源平盛衰記』全釈(十九 巻六 3)、『名古屋学院大学論集 人文・自然

科学篇』60-2)。また、当該期の漢字の省画化現象という観点から、「省画化の展開」の項目を専門百科事典に執筆した(『漢字文化事典』丸善出版)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 早川厚一・曾我良成・近藤泉・村井宏栄・橋本正俊・志立正知・森田貴之・山岡瞳 | 4. 巻 59-2 |
| 2. 論文標題 『源平盛衰記』全釈（一八 巻六 2） | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇 = THE NAGOYA GAKUIN DAIGAKU RONSHU; Journal of Nagoya Gakuin University; HUMANITIES and NATURAL SCIENCES | 6. 最初と最後の頁 55-144 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15012/00001430 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 早川厚一・曾我良成・近藤泉・村井宏栄・橋本正俊・志立正知・森田貴之・山岡瞳 | 4. 巻 58-2 |
| 2. 論文標題 『源平盛衰記』全釈（一七 巻六 1） | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇 | 6. 最初と最後の頁 42-114 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 村井宏栄 | 4. 巻 19 |
| 2. 論文標題 観智院本『三宝絵詞』における重点（、） | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 言語と表現 研究論集 | 6. 最初と最後の頁 17-28 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 村井宏栄 | 4. 巻 116 |
| 2. 論文標題 二巻本及び三巻本『色葉字類抄』における注記格納 | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 名古屋大学国語国文学 | 6. 最初と最後の頁 196-212 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|--------------------|
| 1. 著者名 早川厚一・曾我良成・近藤泉・村井宏栄・橋本正俊・志立正知・森田貴之・山岡瞳 | 4. 巻 60-2 |
| 2. 論文標題 『源平盛衰記』全釈(一九 卷六 3) | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇 | 6. 最初と最後の頁 1-85 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

| | |
|-------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 日本漢字学会編 | 4. 発行年 2023年 |
| 2. 出版社 丸善出版 | 5. 総ページ数 648 |
| 3. 書名 『漢字文化事典』(「省画化の展開」の項) | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

| |
|--|
| 椋山女学園大学教員一覧 https://success.sugiyama-u.ac.jp/teacher/index.php?tid=h2011112 |
|--|

| 6. 研究組織 | | |
|---------------------------|-----------------------|----|
| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
| | | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|